

# 発刊にあたって

柏木 哲夫

(公財) 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団 理事長)

公益財団法人 日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団はさまざまな事業を展開していますが、財団の名称が示すように、ホスピス・緩和ケアに関する研究事業は財団の最も重視している分野です。この研究事業の目的は日本のホスピス・緩和ケアの質を向上させることです。2011年4月に公益財団法人として認められたことを1つの契機として、人々のためになる研究活動を推進したいと願っています。

財団の研究事業として、2014年に「遺族によるホスピス・緩和ケアの質の評価に関する研究3 (J-HOPE3 研究)」が実施されました。

本研究事業は、①遺族から見たホスピス・緩和ケア病棟におけるケアプロセスの評価を明らかにする、②遺族からみた患者の終末期における Quality of Life 明らかにする、③付帯研究を実施し、現在の日本の緩和ケアが抱えている臨床的な問題の解決を目指す、④遺族の悲嘆・抑うつなど死別後のアウトカムの実態について明らかにする、⑤遺族調査に協力した参加施設に調査研究の結果を全国平均値とともに送付し、各施設の改善点を得るための基礎データを提供する、以上、大きく5つを目的として実施されました。

本研究では緩和ケア病棟 133 施設 10,715 名、緩和ケアチーム・一般病院 20 施設 1,518 名、診療所等 22 施設 1,478 名にご参加いただきました。過去2回の J-HOPE 研究と並んで世界的にも非常に大規模な調査・研究となりました。ご協力いただいた遺族の方々に感謝したいと思います。

今回、J-HOPE4 研究の発刊にあたって、まず研究の目的を以下にまとめます。

1. 遺族からみた患者が受けた緩和ケアの質の評価および遺族の悲嘆や抑うつの実態について明らかにする。
2. 個々の研究参加施設に緩和ケアの質の評価および遺族の悲嘆や抑うつの結果をフィードバックすることにより施設の質保証・質改善の情報を提供する。
3. 付帯研究を実施し、わが国の緩和ケアが直面している臨床的・学術的課題に対して科学的な調査を行う。
4. East-Asian collaborative Study to Elucidate the Dying process (EASED) 研究との連結により、緩和ケア病棟で行われている医療の実態と、それらの遺族による終末期医療の質の評価との関連性を明らかにする。

今回で J-HOPE 研究は4回目となります。過去3回の J-HOPE 研究ではホスピス・緩和ケアの質の経時的変化と改善すべき点を明らかにし、結果を各研究参加施設にフィードバック、または、国内外に研究結果を公表することによって、ホスピス・緩和ケアの質の保証、改善へと貢献してきました。本研究では過去最多となる、50の付帯研究が設定されており、ホスピス緩和ケアについてより詳細な探索が期待されます。